

「ワタシの好きなぼうりよく」 第一稿 作：川尻恵太

開演3分前。

舞台上、誘導していたスタッフの1人、前説を始める。

瀬野「今日はパインソー「ワタシの好きなぼうりよく」にご来場いただきまして、  
誠にありがとうございます。この物語が始まります前に、お客様に  
少しばかりお願いがございます。まず一点目」

瀬野がマイムでポケットから携帯を取り出すと、  
後ろに映像、携帯を持つ手元が映る。

瀬野「携帯電話の電源はお切りください」

(AUの場合の手元)

(DOCOMOの場合の手元)

(SOFTBANKの場合の手元)

その他各種スマートフォンの手元。と、その切り方。

瀬野「携帯電話の音が途中でなった場合。この物語のどの部分に差し掛かっていると、  
その時セリフを言っていた人間が、好きな歌を1コーラス歌うというシステムに  
なっております。それ故に大変世界観が損なわれてしまう可能性がございます」

■(映像)結構ガチで撮影したもの。(カット割りはシリアスに)

テレビの音が聞こえる。

食卓で、娘と父と母。

母「で、相手は誰なの？」

娘「……わかんない」

母「…わかんないってあんたねえ！！」

父「やめなさい！！ゆかりだって、好きでこんな事になったわけじゃ」

娘「…ごめんなさい」

母「ごめんなさいって言ったってね。ゆかりはまだ高校生ですよ？

どうするの？世間様にどう言ったらいいの？」

娘「学校は…もうやめるから」

父「じゃあ、ゆかりは、その…産みたいんだな？」

娘「……」

母「(泣く)」

娘「ワタシ……」

携帯の着信が鳴る

津軽海峡冬景色がかかり。

娘、津軽海峡冬景色を歌う。

そして歌い終わり。

娘「ワタシ……産みたい」

■映像おわり。(プツンと切れる感じで)

瀬野「えー、案外合う場合もあるんですけども。

いたずらに携帯電話を鳴らさないようお願いいたします。

二点目、途中でトイレに行きたくなったよ。っていうお客様、出来れば今のうちに行っていただけるとありがたいのですが、どうしても、急な尿意、急な便意、っていう場合は、ご遠慮なく、入口付近におります、スタッフにお申し付けください」

アナウンス「それではただいまより、1分間のトイレタイムを設けたいと

思います。舞台上では出演者による粘土工作を行います。

よういスタート」

出演者現れて

舞台上で、出演者が粘土で何かを作る(一分間)

アナウンス「トイレタイム、終了です。それでは出演者による、粘土作品の

発表です」

出演者「(作品名)」

出演者去る。

瀬野「はい、ありがとうございました。これで、ようやく物語がスタートできます。  
では、開演です。今から約10秒後に物語は始まります」

立ちつくす、瀬野。10秒待つ。

物語スタート。

ME①

瀬野「時間も場所も定かではありません。だからと言って綿密に作りだされた  
架空世界でもありません。じゃあそれはいったいなんでしょう？と問う人がいれば、  
私はその質問を投げかけてきた人物の目をじいっと見つめながらこう言うでしょう。  
さっぱりわかりません。さっぱりわからないのです。愉快的事に、  
人間はわからない事を、わからないなりに、話す事ができ、それによって、  
ある解釈を、受け手、あるいは、自分に、押しつける事ができます。  
宇宙の成り立ちを考えるのと同じです。例えばの話です。  
これは極々例えばのお話です。そのとある場所。便宜上、とある街。には  
大きな大きな塔がありました」

色のある場所から人々が現れて。監視カメラに向かって話す。  
映し出される映像。

緒方「ああ、あの塔の話ですか？僕が知ってる事ですよ？  
知ってる事、というのかどうかはわからないけれど、  
あれは、神様が作ったんだと聞いた事がある。  
だってさあ、てっぺんが見えないでしょ？」

どンドンセリフにかぶって話し始める人々

横長「塔？塔がどうしたって？あの塔がなんなのか？って。  
あの塔はこの街のシンボルだよ。誰が作ったのかって？  
そりゃああれだろ？ものすごく昔に活躍した著名な建築家だろ。  
名前は知らないけどさ」

西岡「塔の話はしないように言われているんです。理由はわかりません。  
でもうちでは昔からそうでした。塔の話はしてはいけないと言われているんです。  
ワタシ、一度万引きで捕まった事があるんです。もう10年以上前ですけど。  
その時、母が「塔から悪魔がおりてきて、あなたに乗り移ったんだ」と言って

泣いた事を覚えています。多分、あの塔に悪魔が棲んでいると思っているんです。

え？私がどう思っているかって？それは、まあ、ありえないと思いますよ」

瀬野「では、その塔はなんなのか？気になる」

緒方「気になって」

横長「気になるような」

西岡「気になって」

瀬野「しかし、それでも、ある種の恐怖によって、その塔がなんなのかを

突き止めた人間はいない。いたのかもしれない。が、誰も明言しない。

それを繰り返していくうちに、いつか遠い未来に、それが解明される日が来る

と、無責任に、なにやら「希望」という名のついた立派なものに

群がって食らいつくし、要するに、投げっぱなしにするのである。

では、話を始めましょう。（この時点からAがスタート）

この話の軸は大きく分けて2つ。そうなる可能性を秘めた世界と、

そうなってしまった結果の世界。明記はしませんが、わかりやすい分け方をします。

なにでわかるかと言いますと、表現と言われているもの。

表し方でその差別をします。ああ、なんて事でしょう。もう始まっている。

もう、始まっている。始まっている」

## ■A

### ME②

色のあるところから出てくる。番場。

番場「はい、それでは、この街のツアーの目玉。見てください。これが塔です」

緒方「ああ、これが」

番場「はい、質問ある方いらっしゃいますか？」

西岡「はい」

番場「はい、クソデブ」

西岡「え？」

番場「あなたですよ、クソデブ」

西岡「え？ワタシ、クソでもデブでもないんですけど」

番場「だから言ってるんですよ。クソデブにクソデブって言ったら失礼じゃないですか。

だからクソデブじゃないあなたにクソデブという分には失礼じゃない。

わかりますよね？」

西岡「はあ」

番場「じゃああなたはクソデブです」

西岡「質問いいですか？」

番場「駄目です」

西岡「え？なんでですか？」

番場「あなたがクソデブだからです。他に質問ある人いますか？」

横長「はい！」

番場「はい、ミノタウロス」

横長「え？」

番場「ミノタウロス」

横長「すいません、僕、身体の半分が牛じゃないんですけど」

番場「だからです」

横長「え？」

番場「身体が半分牛の人に向かって、ミノタウロスって言ったら失礼じゃないですか」

横長「そうかなあ」

番場「じゃああなたは、身体の半分がベトちゃんな人に向かって、

あ、ベトちゃんドクちゃんだ！って言いますか？言いませんよね？」

横長「いや、言うかもしれませんよ、ねえ」

緒方「言うんじゃないですかね？」

番場「言わないでしょう。身体の半分がベトちゃんな人を見かけたら、

あ、人間だ！！って言うでしょう」

横長「そっちの方が酷くないですかね」

番場「じゃああなたはコウモリを見かけて、あ！コウモリだ！って言うんですか？」

横長「言いますよ」

番場「あなたは？」

西岡「言うと思います」

番場「え？」

緒方「いいですよ、ねえ」

横長、西岡「はい」

番場「(箱からケーキを出して)じゃあケーキを食べましょう！！」

緒方「ええー？今ですか？」

番場「おめでとうございます！！」

西岡「誰か誕生日なんですか？」

緒方、横長「いや」

番場「今日はね！うちの娘の誕生日なんです！！これ、娘の為に買ったケーキなんです」

西岡「じゃあいらないです」

番場「でもだからこそ！！みなさんに食べていただきたい」

緒方「いや、娘さんに食べさせてあげてください。僕が娘さんだったら

他の人に自分のケーキを食べられるのなんて嫌ですから」

横長「娘さん、何歳になったんですか」

番場「そうですね、5歳になります。……生きていれば」

緒方「いただきますよう」

西岡「そうですね」

番場「ちくしょうあの時！！」

緒方「やめてください、聞きたくない」

番場「聞いてやってください、娘の話を」

西岡「ガイドさん……」

番場「私がすべて悪いんだ。私が、彼女さえ作ってれば、そして、その彼女と

結婚さえしていれば、娘は生まれてきていたかもしれないんです。

あの時、無理にでも、中出ししていれば、そしてそれが着床していれば、

娘は5歳です」

横長「すごくどうでもいい話なんですけど、誰に中出ししようとしてたんですか？」

番場「サボテンです。穴を開けたサボテンです。サボテンは言葉がわかるといいます。

だったら、ワタシの子供を産んでくれてもいいんです」

緒方「なあ、気付かないか？」

西岡「何？」

緒方「この人、終わってる」

番場「さて、塔の説明をしようと思います」

後ろのパネルの色が一色になる。

映像が映し出される。

「塔の絵」等。番場、指し棒で、指しながら解説。

番場「この街の真ん中にある塔、全長は定かではありません。この辺が

雲を突き抜けファーラウェイしてる事だけがわかっています」

緒方「塔の材質はなんなんですか？」

番場「主に、土です。土を何かによってどうにかして、固めたものです」

西岡「強度に問題は無いんでしょうか？」

番場「今のところ、塔自体が倒れるというような事は言われていません。

検証さえされていません。ただ、ここ200年の内に、塔の一部がはがれおちて、

人が下敷きになるという事故が15回起きています」

横長「死人が出たんですか？」

番場「いえ、死人は出ていません。下敷きになった人はみな「イテテテテ」と  
言いながら這い出てきたそうです」

西岡「この塔は、いつ頃作られたものなんですか？」

番場「わかりません。今まで何度か調査しようとしたものがいたそうですが、  
みんな途中でいなくなっています」

横長「やっぱり噂通り、これは神が作ったものなんですか？」

番場「わかりません」

緒方「でも、だから、調査した人が突然神隠しにあったようにいなくなっているのでは？」

番場「話を誇張しないでください。調査していた人は、みな同じ言葉を残して  
消えているのです」

西岡「それはいったいなんですか！？」

横長「どんな神秘的な言葉を！！」

緒方「その中にヒントが隠されているのでは！？」

番場「私も、この言葉の意味をずっと考えていたのです。でも、どうしても、  
一つの答えしか見つけられませんでした」

西岡「それは？いったい」

映像一杯に映し出される文字。

「飽いた」

西岡「あ」

緒方「い」

横長「た」

番場「飽きたんですよ彼らは」

映像切り替わり。瀬野の顔。

瀬野「では、交換しましょう」

西岡、緒方、横長、番場散り散りに、2歩ごとに、スローモーションではける。  
そこに大川がずかずかと入ってきて、瀬野(映像)と話す。

大川「交換？」

瀬野「そうです、交換。しにきたでしょう？」

大川「ああ、そうでした」

瀬野「ではワタシから」

大川「はい、……どうぞ」

瀬野「では、今日は、わたしの代わりにクマプンが喋ります。

(人形のクマプンを手に持って)やあ、僕クマプン、クマの国から  
やってきたんだプン。今日は、このお姉さんの代わりに、  
クマプンが話をするプン。(チクワをもう片方の手に持って)  
やあ、僕チクワ、穴があいているんだ。この穴は製造過程で、  
出来る穴だよ。じゃあお話するプン。……するチクワ。  
チクワだプン。(乱暴にクマプンとチクワを投げ捨てて)  
では、お話します」

大川「今の……」

瀬野「お話します」

大川「どうぞ」

瀬野「ワタシの主人は、漁師です」

大川「はい」

瀬野「もう結婚して10年がたちます」

大川「10年……はい」

瀬野「さて、ここで問題です。私は今幸せでしょうか？不幸せでしょうか？」

大川「さあ、私にはわかりません」

瀬野「では、ヒントを一つ」

瀬野カメラに背を向けて服を脱ぐ。背中にアザ、アザ、アザ、アザ。

大川「不幸せなんですね」

瀬野「正解は幸せです」

大川「マゾなんですか？」

瀬野「違います。私は暴力が嫌いです」

大川「じゃあ、なんで幸せなんですか？」

瀬野「それは主人が、ワタシの事を愛していると確信しているからです」

大川「暴力によって？」

瀬野「いいえ、これは、なんと言っていいかわかりませんが、  
旅なんです」

大川「旅」

瀬野「主人が私を愛する旅、そして私が主人を愛する旅」

大川「旅、ですか」

瀬野「もう一度言います。ワタシの主人は漁師です」



映像ぷつんとキレル。

大川口ずさむように歌う。ソーラン節。

船を漕ぐように出てくる。

岩国、正岡、野方。

SE荒れ狂う海。

岩国「だっぺ、のっぺ、からって！！」

正岡「おお、天気悪べしー！！」

野方「じゃあどすんだべこれえー！！」

大川「あのお」

岩国「わあ、なんてこった、女が海にたつとんど！！」

大川「乗っていいですか？」

正岡「こういう場合どおした方がいいんだ？」

岩国「乗せとけー、神様かもしれん」

野方「のんねのんね」

大川「じゃあ失礼しまして」

岩国「おめさん、こんなところで何してたんだ！？」

大川「ちょっと濡れちゃいまして」

正岡「たってたやないかー！！」

岩国「そや、立ってたやないか！！」

大川「だから、濡れたから、ちょっと本気出ただけなんです」

正岡「本気って、なあ？まあ、いいけども」

大川「人は、本気を出せば、水の上に立てます！！」

野方「いやいやいやいや、嘘つくなし、俺らもう30年海にでとうけど、

水に立った事なんて、一度もねっぺよ」

岩国「そやそや」

漁師たち「あっはっはっはっは」

大川「それは本気じゃないからです」

野方「ばかにすな！！おらあ本気で漁師やっとうど！！本気でなけりやあ

続けられるかこんなもん！！」

大川「でも水の上に立てないんですよ？」

野方「そ、そだ」

大川「それは本気じゃないからです」

野方「じゃあ何か、おめえ、本気出せば空も飛べるはずとおもつとるのか」

大川「それは無理です」

岩国「何言ってんだこいつ、はんかくせえ」

正岡「仕事すんべ仕事！！」

野方「網あげんぞお一、せーの！！」

漁師たち「よいせー！！よいせー！！」

岩国「大漁やでえー！！イモハンがいごっそ取れとるダニー！！」

大川「イモハン？」

野方「こっちにペトロクティブオグマスが紛れとるだに」

正岡「捨てろ捨てろ、びっぎを曲げられんぞ」

大川「何言ってるんですか？」

岩国「素人は黙ってろ！！ああ、こんなに、アガンモンゴンがこびりついてもうてー」

正岡「アガンモンゴンそんなついてたら、ウゴイガニが死んでしまうがね」

野方「アマジョッパリかけとけ、ウゴイガニもアガンモンゴンもようけでしゃばるきに！」

岩国「休憩しようー！！今日うちの嫁さんがぎょうさんオジロメジメジパート1作って  
くれてるからよお」

野方「おめんところの嫁さんのオジロメジメジパート1はまちやまちや美味いげしな」

岩国「おめえも飲むか？オジロメジメジパート1」

大川「なんなんですか？オジロメジメジパート1って？パート2もあるんですか？」

岩国「はあ？パート2？何言ってんだお前？ほら、飲め」

石ころみたいなの出して

大川「飲み物じゃないじゃないですか」

岩国、石ころみたいなのぎゅーっとすると汁が出る

大川「あ、飲み物だ！」

みんな飲む。

岩国「さあ、仕事すっべ！！マコロニ、シモヤケ、アタリチラシ」

野方「ミツクラ、モヒツソ、アベモヤシ」

正岡「シノゲ、オジヤミ、アドコンガ」

大川「全部知らない魚！！」

岩国「サバ、サバ、サバ」

大川「サバ！」

正岡「クモミント、オジャカレ、シタビラメ」

大川「シタビラメ！！」

岩国「イワキコウイチ」

大川「いわきこういち！！」

野方「よっしゃあ、大量に取れたあー、引き上げんべー！！」

波の音。

そこから掛けてはなれる。大川。

岩国「まった水の上にとつとるがん！！」

野方「幻でもみとるがだ？」

舞台パネルにぶち当たり、一回転して帰ってくる大川、拡声器を持っている。

大川「唐突にお聞きしてよろしいですか？」

正岡「ああ、なんだあ？」

大川「みなさんは、奥さんの事を愛していますか？」

パネルの色変わり。全員まっすぐ前を見る。

野方「男が、その問いをされた時、なんと答えるのが正解なのか」

正岡「当たり前だ」

野方「なのか」

岩国「おい、男にそんな事聞くんじゃないよ」

野方「なのか」

正岡「ベイビーベイビー聞いてくれよ、ベイビー、君が太陽だとしたら、  
いつか沈んでしまうだろう。君が沈む夕焼けに僕は歌を歌うだろう。  
それは風の音に聞こえるかもしれない。だけど信じて欲しいんだ。  
ベイビー、今世界が終わっても、僕は君のそばにいるよ」

野方「と、ジョンレノン風のポエムを読むのか」

岩国「君は僕の心を満たす真っ赤なワインで、僕は君の飲み過ぎで、  
いつも二日酔いなのだ。だから君に会うたびに僕の顔は真っ赤なのだ。  
君は眠るたびに美味しくなる、真っ赤な真っ赤なワインなのだ」

野方「と、野島伸司風のポエムを読むのか」

正岡、岩国「どっちもよく似ている！！」

野方「そして正解がわからない場合、男達は大抵の場合において」

パネルの色戻る。

全員が下を向く。それを見ている大川。

大川「質問をしてから20分の間、彼らは黙り続けました。

もしくは眠っていたのかもしれませんが」

瀬野がパネル裏から現れて。

瀬野「船を漕ぐとは良く言ったものです」

大川「しかし20分の沈黙の後、1人が口を開きました」

正岡、顔をあげて

正岡「イエス、アイ、ドゥー」

正岡、岩国、野方パネルに消える。

瀬野「そう言ったのですか？」

大川「そのような事を言っていたと思います。間違えないでください。

そのような事です。私はそれを聞いた帰りに大きな岩に頭をぶつけてしまったので

正確には覚えていないんです」

瀬野「結局、あなたは、何をしに行ったんですか？」

大川「だから、この目で見たかったんです。あなたが愛しているという、その男性を」

瀬野「あれ？ワタシ、一言でも、愛しているなんて言いましたか？」

大川、瀬野パネルに飛び込む。逆にパネルから飛び出してくるのはスーツ姿の、緒方。

緒方「お集まりの皆様、本日は、この緒方幸信の演説に集まってお集まりいただきまして

誠にありがとうございます。皆様にお集まりいただいたのは、この街の

新プロジェクトについてであります。思えば、私が市長になってから、ここ半年、

急激に犯罪の件数が増え、急激に人口が減り、急激に人気の無くなった感のある

我が塔の街ですが。色々な皆様の意見を取り入れた上で、検討しましたところ。

この街を、愛のモデル地区として、この国で、最も愛のある街として、

再生したいと思っております。この国のシンボルでもある、塔のある街として、もう一度活気を取り戻したいのです。みなさま、良く見てください。  
見上げてください、あの塔を、ローマ字の「I」に見えませんか？そうです。  
愛です。自らの事も指し、そして、人を思いやる心をも指す。あの塔の形こそが、この街の新しい理念なのです。何か、質問のある方はいらっしゃいますか？  
はい、そこの方、はい、はい、はい、うまい棒です。はいそこの方、はい、はい、握り方はこうです(フォークの握り)。はい、そこの方」

パネルから、西岡が現れ。

西岡「週刊黄色いワニの西岡です。塔の事は調査したのでしょうか？」

緒方「はい、塔の調査はしていませんが、何か問題でも」

西岡「塔が本来持っている意味をわかっていないのに、

安易に意味を付けてしまうのは如何なものでしょうか？」

緒方「それでは逆に質問しますが、この中にあの塔の作られた理由や意味を

知っている方はいらっしゃいますか？(見渡して)1人もいらっしゃらない。

という事は、意味なんてないのと同じです。今生きている我々にこそ、

あの塔に意味を作る義務があるのです。それと先ほどの方、すいません、

握りはこうでした(カーブの握り)どなたでも構いませんが、塔の調査を

したいのであれば、ご自由にどうぞ、それは個人の自由です」

西岡「今までだれもしてこなかったのですから、誰もしないでしょう。

私たちは停滞を望みます」

緒方「停滞とは、衰退では？」

西岡「そうかもしれません。ところで、塔の調査はしてありませんが、

あなたの調査はさせていただきました」

緒方「ワタシの調査といいますと？」

西岡「あなたは市長になる5年前。とある施設で働いていましたね」

MEIN

パネル灰色になる。

西岡は消える。舞台上に岩国、野方、横長。監視カメラの方をそれぞれ向いている。

距離感バラバラで良い。

映像が映る。

岩国「おめんなあい、おめんなあい、おめんなあい」

野方「ういまえん、ういまえん、ういまえん」

横長「うるいえうらあい、うるいえうらあいうるいえうらあい」

謝罪の言葉。

緒方「何を謝る必要がある？」

岩国「あつれ、おくらりはいきれらいけらいろれはないらろうか？」

緒方「何故だ？何故、生きていてはいけない？」

野方「らつれおくらは、うわくはらすことをれきらいし」

緒方「うまく話せなくてもいいじゃないか」

横長「れも、れも、らとしたら、らんれ」

番場が現れて。彼らの写真を撮る。フラッシュフラッシュ。

横長「ひろろ、ちらうようり、みらえるのれすか」

緒方「違うようになんか見てない」

番場「弱者を守る会のものですが」

番場、名刺を緒方に渡す。野方、横長、岩国。土を耕し始める。

緒方「弱者を守る会」

番場「この施設では、その、障害を持っておられる方に、過酷な労働をさせている  
そうですね」

緒方「過酷な労働？」

番場「調べはついています。自給自足の生活を強いている事を始め、一日6時間の労働。  
そして2時間の学習時間。オリジナルスイーツの製作や、コンテンポラリーダンス、  
などなど、国が定めている保護条約を大幅に逸脱した行為がみられます」

緒方「保護条約ですか」

番場「我々弱者を守る会としましては、こちらで行われている事を、  
国会に報告させていただき、しかるべき処分が下される事を望んでおります」

緒方「すいませんが、さっきから弱者とは誰の事を指しているのですか？」

番場「おわかりになりませんか？」

緒方「わかりかねます。わかりかねますが、もし、それが彼らを指す言葉なのだとしたら  
ワタシはあなたを許しません」

番場「正当化しようたってそうはいきません。認めてください。

彼らはかわいそうなのです。保護しなければならないのです。

五体満足に生まれた責任は果たさなければならない」

横長「えんえい！！」

緒方「どうした？」

横長「いいがいつあいあっえ、うあくういがおえないんえす」

緒方「じゃあ、先に、石を取り除いてから、それから土を掘りなさい」

野方「ういがおいりにういちゃった」

緒方「後で洗えばいい、今は気にするな」

岩国「おおいよう、おおいよお、こえ」

緒方「それは普段から鍛えていないからだ、だから毎日運動しろと言ってるだろ！！」

番場、岩国を抱きしめて。

番場「大丈夫だよ、今、ここから出してあげるからね。

私たちが君たちを守ってあげるからね」

岩国「おうあってあおってうるんえすか？」

番場「ん？なんだって？」

岩国「おうあって、あおってうるんえうか」

番場「大丈夫だから」

緒方「大丈夫？こいつらの言葉もわからんで、なにが大丈夫だ？え？

俺はこいつらの言葉を理解するのに、もの凄く時間がかかったんだ。

俺はこいつらと会話してんだよ！！

こいつらがどうしてほしいか知りもしないで！！」

番場「守って欲しいに決まってんでしょが！！こんな風に生まれて！！

あんたはこんな風にうまれたら守って欲しいでしょが！！辛いでしょが！！

こいつらはこんな風に生まれて！！不幸なんだ！！」

緒方「それ以上言うな！！」

緒方、番場の襟首をつかむ。

岩国、野方、横長、パネルに飛び込んで、西岡と入れ替わる。

西岡「その時の暴力について、被害者は訴えると言っております」

緒方「暴力ですか、これ」

西岡「暴力です」

緒方「こいつを殴っちゃいけませんか？」

西岡「人は殴ってはいけないのです」

番場「そうやって、戦争が起こるのではないのか、そうやって、それが

積み重なって、折り重なって、入り組んで」

緒方「上等だ、戦争は、侵略する為だけのものじゃないから。

絶対になくなるらない。自分にとって守るべきものがある限り、

絶対になくなりません」

番場「無くなりませんよ、過去は。私は、あなたの過去。なくなりませんよ」

番場、去る。

西岡「あなたの言い分を聞くと、あなたは何かを守るために、暴力をふるったという

事になります。違いますか？」

緒方「違います」

西岡「それは、彼らを、ですか？」

緒方「自分を守ったんです。自分の意見と違う事を言うから、殴ったんです」

西岡「まさしく、それは根本ですね」

緒方「時に、西岡さん。あなたは何を言っているかわからない

作文を聞いた事がありますか？」

西岡「何を言っているかわからない作文？」

緒方「あれねえ、意外と泣けるんですよ」

MEIN

パネル反転。野方が入ってきて。

西岡と緒方はパネルの奥に消える。

野方「あくぶん、おああさんへ、おああさん、おくをうんえくえて、あいあおうごあいま

う、おくはたうん、ひろろはちあいます。おくがいさいのおき、

ころばがはらせらいとひって、おかあらんはとてお、かないいかおおをして、

ごえんなあいといいまいあ、おくは、それをみえいるのが、とてお、かないくて、

なみらがとらりあえんでいあ、れも、このらえ、おくがあたけでそだえあ、

やがいもを、おかあさんにあえたら、おああさんは、とてもうれしいと、

わらっえくえまいあ、おくはそのろき、ああ、おくはうまえてきえ、よかったらあ、

うあえてきて、ほんろによかつらなあとおもいまいあ。らかあ、おかああん、

おくをうんれくえて、おんろうにありあおうごあいまいあ。これかあも、

よおいくおねらいいます」

野方不格好な礼をする。顔をあげて。

野方「それで、その方はなんと言っていたんですか？」



パネルから瀬野が出てきて。

瀬野「怖いと言っていました」

野方「怖いというのは」

瀬野「それが彼女の悩みだったんです」

映像映る。大川の顔。

野方、リコーダーで聖者の行進を吹きながら徘徊する。

大川「それでは、交換しましょうか？」

瀬野「ワタシの話はしました」

大川「次はワタシの番です」

瀬野「どうぞ」

大川「怖いんです」

瀬野「何が？」

大川「全てが怖いんです」

瀬野「全てというのは」

大川「全てです」

瀬野「ミジンコもですか？」

大川「あ、それ怖い」

瀬野「小さいですよ」

大川「大きさの問題じゃありません、なんなんですかあれ、なんでいるんですか？」

何匹いるんですか？一か所に全てのミジンコを集めたらどれぐらいの容積になるんですか？」

瀬野「そんなのわかりませんよ」

大川「だから怖いんです。わからないから」

瀬野「わからないから」

大川「はい、私は何も知らないんです。だから怖いんです」

瀬野「何かは知っているのでは？」

大川「何かってのは…ちょっとリコーダーやめてもらっていいですか？」

野方「あ、邪魔でしたか」

大川「なんで吹いていたんですか？」

野方「いや、なんか、そういう気分だったので」

大川「怖い、気分、怖い」

野方「気分が？」

大川「だって、気分ってなんでそうなるのか、わからないじゃないですか」

野方「そりゃわかりませんよ、ねえ」

瀬野「ええ、それはわからないものなんですよ」

大川「たしかを下さい」

瀬野「確か？」

大川「絶対を下さい」

瀬野「絶対」

野方「世の中には絶対というものは無いんですよ」

大川「それなのに、何故怖くないんです？」

野方「何故って、ねえ」

瀬野「それがあなたの悩み、なんです」

大川「はい、これが」

映像切れる。

大川パネルから現れる。

大川「ワタシの悩みです」

MEIN

パネル色変わる。

大川「ガム」

瀬野「ガムベースに味や香りをつけ、噛む事で風味や口当たりを楽しむ菓子の総称！！」

大川「ガムベース」

瀬野「南米や東南アジアに生える木から採れる植物性樹脂を中心に、

酢酸ビニル樹脂、エステルガム、ポリイソブチレン、炭酸カルシウムなどを混合し、チクルの噛み心地や弾力などを調整して作られるもの」

大川「聞いてください、ガムを調べたら、わからない事が増えたんです。調べれば調べる

程にわからない事は増えていくんです。結局どこにたどり着くの？」

野方「ではこうしましょう、わかるような名称にして、わかったような気になるんです。

そして、勘違いで、一生を過ごすのです」

大川「じゃあガムの名称は？」

野方「アジウマーイです」

大川「じゃあ、ウニ！！」

野方「アジウマーイです」

大川「納豆」

野方「アジウマーイ」  
大川「全部アジウマーイじゃないか！！」  
野方「全部アジウマーイ！！」  
大川「舌がバカだ！！」  
瀬野「わかりました」  
大川「何が！？」  
瀬野「いい人を連れて来ましょう」  
大川「いい人？」  
野方「でも、お米まずう、パンまずう、麺まずう」  
大川「偏食すぎる！！偏食は出ていけ！偏食反対！！」

野方スローモーションで、色々な木の実を食べながらはけていく。  
横長入ってきて。

瀬野「いい人です」  
大川「この人がいい人？性格がって事ですか？」  
瀬野「違います」  
大川「何がいいんですか？」  
瀬野「この人はどんな質問にも答えてくれる人なんです」

ワーワーいいながら、子供の格好をした正岡、岩国、番場、西岡が入ってきて。  
横長の前で体育座りをする。

横長「じゃあ質問のあるお友達はあるかな？」  
正岡「はい！！」  
横長「君」  
正岡「子供はどうやったらできるんですか？」  
横長「セックスだよ」  
岩国「はい！」  
横長「君」  
岩国「どうして地球はまあるいの？」  
横長「なんでも時間がたつとまあるくなるからだよ。じじいやばばあが曲がっていくのも  
まあるくなろうとするからだよ」  
番場「はい！！」  
横長「君」  
番場「氷室京介はなんであんなに格好良いんですか？」

横長「氷室京介だからだよ」

岩国「お魚はなんで海にすんでいるの？」

横長「海が好きだからだよ」

正岡「黒人はなんで黒いの？」

横長「最初のエディットの時点で、黒のパラメーターをガッとやったからだよ」

番場「お尻はなんで割れているの？」

横長「サラサーティーなどがフィットしやすいように、お尻の方が合わせにいったんだよ」

岩国「人魚ってなあに？」

横長「人と魚をガッとしたやつだよ」

正岡「車はなんで早いの？」

横長「それは、タイヤが上手い具合に、地面をガッとやるからだよ」

番場「飛行機はなんで空を飛べるの？」

横長「それは、羽根が上手い具合に、空気をガッとやるからだよ」

大川「時折嘘を混ぜて、大雑把に答えている！」

子供たち、立ち上がって。

岩国「ありがとうクロマティ！！」

子供たち「ワー！！」

はける

横長「そうそうそうそう、あの年は辛かったなあー、3割6分打ったのに、  
バースがバカみたいに打ったもんだから、首位打者になれなくてねー。  
でもねえ、思い出すのはあれかな、金石が俺を敬遠しようとしてね、  
でもそれを俺がカキーンつってね、打つてもうて、それが決勝打ね。  
あれ、なつかしいなあー。って誰がクロマティじゃ！！こらあ」

大川「なんて丁寧な！！」

瀬野「さあ、なんでも質問するがいいですよ」

大川「ええー！？じゃあ、人間ってなんですか？」

横長「馬です」

大川「ええー？予想してた答えを下回ってきたあー」

横長「人馬一体って言葉を知っていますか」

大川「はい」

横長「(黙ってうなづく)」

大川「絶対違う！！」

瀬野「どや！！」

大川「どやじゃないです」

横長「ハイクオリティーアンサー！！」

大川「どの面下げて！！」

瀬野「これでわかったはずですよ」

大川「何がですか、私は真剣に悩みを話したつもりです。あなたの話もちゃんと聞いたつもりです。その仕打ちがこれですか、酷すぎませんか！！」

瀬野「いいえ、この人はあなたにちゃんと答えをくれます。言ってあげてください」

横長「お嬢ちゃん、いいかい？世の中の殆どの事はどうでもいいんだよ、ほとんどの事は君には関係ないんだよ。だから君が気にしている事は意味がないんだよ」

大川「私は絶対が欲しいだけなんです」

横長「絶対に、君はほとんどの事を知らないで死ぬよ。これだけは絶対だよ」

大川「絶対」

横長「絶対に君は、ほとんどの事を知らないで、死ぬ」

大川「絶対」

横長「死ぬ間際まであがくかい？世の中のすべてを知ろうとするかい？」

大川「それでも私は……」

横長「地獄鍋って知ってるかい？」

大川「地獄鍋？」

横長「生きたドジョウと豆腐を鍋に入れる。そしてそのまま加熱していくと、ドジョウは熱さから逃れるために豆腐の中に逃げ込む、だけど結局は豆腐の中で煮えて死ぬ。これが地獄鍋だ」

大川「なんじゃその知識」

パネル変わる。大川はける。

瀬野、横長はリズムを取っている。膝を使って縦ノリ。

大川と入れ替わりに緒方、岩国、番場が入って来る。

緒方「それでは、他に質問がないようでしたら、塔の街愛の街キャンペーンの

第一弾企画を発表いたします。はい、そこのあなた。はい、はい、

味噌おでんです。はい、はい、こんにやくです。はい、はい、一味です。

七味じゃありません、一味です。はい、はい、あのおでんの質問はやめてもらって

いいですか。はい、はい、それは牛すじです。はい、はい、あ、この2人ですね。

この2人こそが、この街の第一弾のモデルです。そうです。この国一の理想的な夫婦です。愛のある夫婦のモデルになっていただく2人です」

瀬野「理想的な夫婦とはなんでしょう？」

横長「それが質問内容ですか？」

瀬野「そうですね」

横長「あなたは理想的な夫婦ではないのですか？」

岩国「私たちは愛のある生活をモットーに、この国一番の理想的な夫婦として生活していこうと思います」

番場「惜しみなく、ワタシの愛を妻にささげようと思います」

横長「愛されてると感じますか？」

横長、ポケットから包帯を出して、瀬野をぐるぐる巻いていく。

瀬野「そうですね。主人はああいう人ですから、少しわかりづらいところもあるけれども、結局はワタシを愛しているのだと思います。」

横長「これは今、私が撒いているように見えますが、ご主人が撒いたものですよ？」

瀬野「そうです。私に謝りながら、何度も何度も謝りながら、撒いたものですよ」

横長「それなのに、あなたは笑っている」

瀬野「嬉しいからです。まだまだ旅が続く事を、私は喜んでいるのです」

横長と、正岡、パネルの回転で入れ替わり。正岡、瀬野の周りをぐるぐるまわる。

緒方「理想の夫婦とは」

岩国「献身的に夫に尽くし」

番場「一生をかけて妻を守る事ではないでしょうか？」

緒方「綺麗事は綺麗です」

緒方パネルに消える。

MEIN。

岩国「ねえ、明日のお弁当何がいい？」

番場「お弁当かあ？もちろんあれは入るんだよね？」

岩国「みさこ特製出し巻き卵、あとアスパラの豚肉巻き、巻き寿司、昆布巻き、あと一あと一」

番場「巻くなあー」

岩国「みさこが作るとね、普段30分かかかる料理も、5分でできるんだよ」

番場「巻くなあー」

岩国「嬉しいでしょ？」

番場「う、ぬん！」

岩国「ぬん？え？嬉しいでしょ？」

番場「う、ぬん」

岩国「ちょっちょ、としくん、ぬんってなんなの？」

番場「あれ？なんかなっちゃう」

岩国「うんでしょ？」

番場「ぬん、あれ？うんって言えない」

岩国「あ、今言った、うんって言ったよ」

番場「うん、あ、ぬん」

岩国「言い直さなくていいんだよ」

番場「でも嬉しい。みちやみちやのお弁当が毎日食べれて、結婚した

甲斐があったってもんだよ」

岩国「でっしょー？としくんは世界一の幸せもんだね」

番場「こーらあー、自分でいうか？(コツンとこづく)」

岩国「あ、暴力！！」

番場「今のは違うよ。今のはコツンでしょ？愛情あるでしょ？」

岩国「でも蚊が死ぬ威力だった。今、みさこのここに蚊が止まってたら、死ぬ威力だった」

番場「でもみちやみちやは蚊じゃないでしょ？」

岩国「褒めて！！」

番場「え？」

岩国「みさこは蚊じゃないから助かったんだよ？蚊じゃなくて偉いでしょ？」

番場「ぬん」

岩国「ぬんやめてよ、なんか含んでる感じがするよ」

番場「なんか言っちゃうんだよなあ」

岩国「それでも、みさこはとしくんが好き」

番場「みちやみちや……」

岩国「ぬんって言っちゃうとしくんが好き。としくんは？みさこの事好き？」

番場「うん！」

ぬへぬへ笑いながら

岩国「いやいやいやいやいや」

番場「いやいやいやいやいや」

岩国「今、完全に、ぬんっていうところだよな？」

番場「今、そうだ、ぬんのところだ」

岩国「もう、本当、としくんってセオリーキラーなんだからあ」

MEIN

番場「例えば僕らがこのまま夫婦生活を順調に続けていったとして」

岩国「長くても60年というところだろう」

緒方出てきて監視カメラを取り外し。二人を真正面から捉える。

番場「そして、山あり谷あり」

岩国「可もなく不可もなく」

番場「その60年は過ぎていくとする」

岩国「その間」

番場「僕らに残るのはなんだろうか」

パネル回転してみんな出てくる。瀬野と正岡は交代して、正岡の周りを回る瀬野

岩国「極端な羅列」

番場「僕たちの夫婦生活の展望」

緒方話す人間をカメラに抑えていく。

野方「時折送る指輪、晴れた日の庭、新作ドラマに関する感想の交換」

大川「思い出の場所を巡る旅、致命傷にならない程度の喧嘩、両親を交えた食事会」

横長「片方の趣味に付き合うデート、目に焼きついた打ち上げ花火、半年ぶりのセックス」

西岡「新しい家電の購入、浮気疑惑、記念日の約束」

野方「子供の誕生」

横長「飼い犬が死んでからの一週間」

西岡「飛行機を怖がる妻」

大川「それを笑う僕」

番場「夏は暑くてたまらなくて」

岩国「君といくプール」

野方「夕立に襲われて」

西岡「走る君」

横長「庭の桜が咲いて散って」

大川「初雪の朝」



番場「遠く電車で揺られて」  
野方「君の住んでいた街へ」  
岩国「初体験の話」  
野方「僕の嫉妬」  
横長「子供の怪我」  
西岡「心配そうな君の横顔」  
番場「初めて行った街で」  
岩国「手を繋いだぬくもりを」

緒方、客席を映して。瀬野、正岡、緒方を残してみんなパネルの奥に消える。

緒方「僕らはきっと忘れてしまう」

瀬野の身体の一部一部を映しながら。

緒方「君のぬくもりなんて、本当は、触れている時にしか感じない。

どれだけ思い出してみたって、色々なものに置き換えられた情報で、  
それに近いものを探し当てるに過ぎない。

実際、君の細い体を抱きしめるのと、布団を丸めて抱きしめるのとは  
さほど変わりはない。

それでいい、そうじゃなければ、僕は耐えられない。

物理的に忘れる事ができなければ、それでも覚えているふりを続けなければ。

僕は」

カメラ切れる。緒方、監視カメラ位置につけ直して、パネルに消える。

瀬野「あなた」

正岡「ん？」

瀬野「そろそろ夕食にしましょうか？」

正岡「そだな」

瀬野「それじゃあ、少しテーブルの上を片づけなくてははいけませんね」

正岡「すまん」

瀬野「なんであやまるんです？」

正岡「すまん」

瀬野「やめてください」

正岡「どうしてだ」

瀬野「どうしてです？」

正岡「またお前は傷付いている」

瀬野「大丈夫ですよ、私は生きています」

正岡、瀬野を抱き締める。

瀬野「都合良く優しくしないでくださいな」

正岡「愛してる」

瀬野「都合良く言葉にしないでくださいな」

正岡「愛してる」

瀬野「わかっていますよ、だから、一緒に居れるのです。あなたがワタシを愛してるから

私はあなたと一緒にいるのです。一つ約束してくださいな」

正岡「なんだ？」

瀬野「私が死ぬ間際、必ずそばにいてください」

正岡、瀬野の包帯を外していく。

パネルから、横長と大川現れる。横長は電話をしている。

横長「だからね？おたくで買った、その、なんつーの、ラブ、ラブドールっつーの？

姫ちゃん3000？つーのこれ？これ不良品だろ！うん、うん、うん、

3000ってなんなのよ？うん、うん、女性3000人分の柔らかさってなんだよ。

ぐにやぐにやって事か？ちょっと待てちょっと待て」

横長、大川の腕とかを触る。

横長「固えじゃねーかよ！！違うよ、そんな事いいわ！！そんな事はいいんだったわ。

違うの。ラブドールったらあれだろ？あれの、あれできるやつだろ？お前、

そう、そう、それだろ？って事はだよ？あるはずだろ。あれが、あれだよ、

その、なんだよ。はっきり言っていたかかないとって。だから・・・

穴が無いでしょうが！！股に穴が無いでしょうが！！」

横長、大川の股を覗き込む

横長「無いでしょうが！！どうやってやんのよこれ。俺あれよ？おちんちんグキって

なっちゃったのよ。ツルっとしてるからさあ、穴あると思うじゃないの。

あ、別売りなの？え？付属のDVDで説明してたはずだって。はい、

いや、見てないけど」

## SEインフォメーション

正岡「姫ちゃん3000の取り扱いについて説明します。

姫ちゃん3000はとても画期的なラブドールです。

とある国のとある科学者がとある事を発見しとある方法を  
実践して作ったのが姫ちゃん3000です」

横長「そこちゃんとせえよ！」

正岡「この姫ちゃん3000ですが、なんと会話機能が付いているんですね。

ボタンを押す事によって、なんと5パターンの会話ができます。

まず、肩のあたりにあるボタンを押していただきますと」

瀬野「あ、そうか、鈍行で行くより、快速で一回駅を通り過ぎて、鈍行で折り返した方が  
5分早いパターンかあ」

正岡「と、言います」

横長「いらん！！」

正岡「その他にも」

瀬野「え？なんでこんなところにクモの巣？」

正岡「や」

瀬野「このコーンのさあ、ポップコーンにちゃんとなるやつとならないやつの  
差ってなんなの？」

正岡「など、さまざまなシーンに合わせた会話を楽しめます」

横長「いらんいらん！！」

正岡「あと、穴は別売りです」

横長「あ、このタイミングでいう？」

正岡「その他、さまざまな機能を搭載した姫ちゃん3000」

横長「もういいもういい」

横長DVDを消す。瀬野と正岡消える。

横長「で、その姫ちゃん3000が」

大川「海が見たい」

横長「などと抜かす」

大川「海が見たい」

横長「それは右手の付け根に付いていたボタンで、それを押すと、  
必ずこいつは」

大川「海が見たい」

横長「と、抜かすのである」

ボタンを連打する横長。

大川「海が見たい、海が見たい、海が見たい、海が見たい、海が見たい」

横長「とにかくこいつはいらない機能が満載の偽ラブドールであった。

頭の後ろにこれみよがしについているボタン。あまりにもあからさまにそれはついていたのだ。なので俺は警戒して、しばらくの間押さないでいた。で、ふと、まあ、魔が差したんだろうな。押してみたわけだ」

物凄い風の音

横長「突風が吹いた。なんだこれ！！いるか？この機能！？ていうか機能かこれ？

もの凄く超能力チックな機能であった。それでも、それでもだ」

大川「海が見たい」

横長「なんて、こいつが言うもんだから、俺はね。思い返してみた。

そういや、異性と海に行った事なんてなかったなあなんて」

パネルから西岡出てくる

西岡「何？こんなところへ呼び出したりして」

横長「えっと、あの、好きです」

西岡「ああ、ごめん、ワタシ結婚するんだ」

パネルから、ほぼかぶりで、岩国出てくる。

横長「好きです」

岩国「ごめん、ワタシ結婚するんだ」

パネルからほぼかぶりで、瀬野が出てくる。

横長「好きです！！」

瀬野「ごめんワタシ結婚するんだ！！」

横長「なんなんだお前ら、歴代の俺をフリなされたみなさん！！

ああ、俺は言ったよおめでとう！！お幸せに！！」

3人「ありがとう！！君も、いい人が見つかるといいね！」

西岡、岩国、瀬野、はける。

横長「俺は好きだを封印したさ！だってそうじゃない、まるで魔法だもの。

好きだ！で、発動する、ごめん、ワタシ結婚するんだのフレーズ。

そして、それに続く俺の、おめでと、お幸せに。心の中では、

不幸になれ！と、唱えながらの、上っ面お祝いフレーズ」

大川「海が見たい」

横長「っていうもんだから、明確に、正確に、何をしたかを教えるつもりはないが、

とりあえず、俺は、旅の支度を始めたのだ」

横長、大川の肩についているボタンを押す。

横長はける。西岡入って来る(通りかかる)

大川「あ、そうか、鈍行で行くより、快速で一回駅を通り過ぎて、鈍行で折り返した方が

5分早いパターンかあ」

西岡「調べたらそうみたい」

大川「遠いんでしょ？偉いねえ。お仕事？興味本位？」

西岡「どっちも」

大川「偉いねえ」

西岡「一応これでもワタシ、ジャーナリスト気取ってるから」

大川「なんて場所だっけ？」

西岡「恵みの里」

大川「ありがちっすねえ」

西岡「世の中ベタが主流なのよ」

大川「波があるじゃない？で、船があるじゃない？で、まあカツオね。タラ、ね」

西岡「魚ね」

大川「で、まあワカメね」

西岡「うん」

大川「そこからのサザエって！！なんで？なんで急にサザエなの！？貝の中でも

全然ベタじゃない！！」

西岡「ああ、うん」

大川「なんでイクラちゃんの母親はシャケ子さんじゃないの！？ねえ！？」

西岡「そんなにサザエさんに言及しないの！！」

大川「ワタシ、サザエさんジャーナリストになる」

西岡「そんな限定的な」

大川「いささかってなに？海の、何？」

西岡「出がけに、そんな質問されても」

大川「質問する側になるんだったら、質問される側の気持ちも知った方がいいよ」

西岡「嫌な気持ち」

大川「ね、嫌な気持ちになるでしょ？」

大川と野方入れ替わる。(場所は変わってもよし)

西岡「今、嫌な気持ちですか？」

野方「あなきもりではらいれす」

西岡「緒方先生、覚えていますね」

野方「おやたせんえい、およいでいます」

西岡「泳いでいる？」

野方「おおいていやす」

西岡「誰か、言葉の通じる人はいませんか？」

野方「わありあせんか」

西岡「困ったな。市長になる前に、先生は何か言っていませんでしたか？」

緒方が現れている。

野方「あい」

西岡「愛？」

野方「あいのあういえんかあ、まいをみえば、わかう、そうあまいうくりを」

緒方「愛のある視点から、街を見ればわかる、そんな街づくりを」

野方「あいあえつくすではなう、まあ、せつくうもまいではあう」

緒方「愛はセックスではなく、またセックスも愛ではなく」

野方「こえからわたいのつくるまいをみていくああい、わたいはしんいつの  
あいをうくりまう」

緒方「これからワタシの作る街を見ていてください、私は真実の愛を作ります」

西岡「言語」

野方「僕の言語は神様によってつくりかえられてしまった」

緒方「君の言葉をもっと知りたくて、僕は聴く、耳を君に傾ける」

西岡「困った事に、私は、彼が何を話しているのかさっぱりわからなかったのです。

知りたい事を知る為に、そのもっと前に知らなければいけない事がある。

そんな簡単な摂理を私は見失っていたんだ」

野方「えんのうこうおうりょうへいあ」  
西岡「ねえ、私はまず、君の事が知りたい」  
緒方「君の話している事を知りたい」  
西岡「君の事を知るにはどうすればいい？」  
野方「せっくす」  
西岡「交換日記を書きましょう」  
野方「せっくす」  
西岡「わかる？交換日記」  
野方「ふあつく」

岩国、番場出てくる。規則的な動きで。  
西岡と野方は、便せんに字を書き始める、競うように。

岩国「午前0時の冷めたご飯」  
番場「他人の香水の匂い」  
緒方「知ったかぶりの会話」  
岩国「テレビのチャンネル争いと」  
番場「メールの覗き見」  
緒方「慣れる」  
岩国「慣れてしまう」  
番場「波のないところには」  
緒方「波が立ち」  
岩国「波は」  
番場「静かに無くなって」  
緒方「流れない水は」  
岩国「腐る」  
番場「濁る」  
緒方「言いましたよねえ」  
番場「はい」  
緒方「別れないって」  
岩国「はい」  
緒方「で、」  
番場、岩国「別れたいんです」  
緒方「困ったなあ、一応あなたたちは、この愛の街のモデル夫婦なんですよ。  
CMにだって出たでしょ？」

■映像、愛の街のCM。

番場、顔面中にご飯をつけている。

岩国「もう一、顔にご飯粒ついてる～」

番場「え？どこ？」

岩国「どこってというか、顔！！」

番場「口の周り？」

岩国「口の周りってというか、顔！！」

番場「顔で一、大まかに言いすぎだよー」

岩国「おおまかについてんの、顔に盛りつけられてるって言った方が早い感じ」

番場「顔に盛りつけられてるって、またまたあ」

2人「あっはっはっはっは」

愛の街は、笑顔あふれる生活で、あなたを待っています。

■映像切れる

岩国「別れます」

番場「もう疲れてしまったんです。あ、愛の人だ、みたいに指差されるし」

緒方「でも手当は降りてますよね、その辺も考慮して、第一、君たち、

愛し合ってたじゃないか」

岩国「私たちみたいな、一般的な夫婦は出しゃばっちゃいけないんです」

番場「僕は妻を愛していますし」

岩国「私も夫を愛しています」

緒方「なら何故別れる？」

番場「愛の意味がわからなくなったからです。色々なところに呼ばれて、

愛とはなんですかと問いかけて」

岩国「わかりますよね？だって愛の街のモデル夫婦ですもんね？見てくださいよ、

あいとやら、愛とかなんとかいうものをさあ！とか言われて」

番場「毎日、愛とは、バラです。とか、愛とは、真珠です。とか色々言ってたんですけど」

岩国「だんだんネタが尽きてきて、最近では」

番場「これが愛だとしますよね(なんか手に持ってる)。で、マウンドに立つわけです」

岩国「そうすると、妻の私は、バッテリーボックスに立つわけです」

番場「で、投げますよね」

岩国「で、妻の私がカッキーン！！」



番場「……これが、愛です！！」

岩国「追い詰められてるんです」

緒方「わかります。追い詰められてるんだなあと思いました」

番場「だからお願いします」

岩国「わかれさせてください」

緒方「駄目です」

2人「えー！！」

緒方「きっとまだまだ僕たちは愛を知らないのです。あの塔が、本当は  
なんなのか、誰も知らないように」

岩国「あと」

緒方「まだなんかあるんですか？」

パネルから、山田（頭にハート型の被り物を被ったタイトの男）出てきて。

番場「彼なんですけど」

緒方「愛の街のキャラクター、ラブ男くんじゃないか」

山田「あの、やめたいなんですけど」

緒方「ああ、うん、君はもうやめていいよ」

山田はける。

番場「言葉にならないものの意味や意義を聞かれた場合僕らはどうすれば」

西岡「まず言葉を知りたい、あなたを知りたいと思う」

緒方「言葉にならないものは、目にするしかない。見るんだ、今、愛が生まれそうだ」

野方、西岡に手紙を渡す。野方はける。

西岡、それを読む。そのようすを潜水艦の覗くやつで、覗く緒方、番場、岩国。

映像で、手紙の文字が流れる。ワイプに瀬野。

西岡「(以下映像文面と同じ)いひおかはんへ

おくはきつろ、うまえてはいめて、おてあみをかきあう。

おくのころにきおみをもつれいたらいれあいあとうおあいまう。

おんらのひろに、ころばをつらえるのは、はるかいいのえうが、

こえからは、あならにおくころを、おおひえひたいとおろいやう」

手紙中、ワイプの瀬野は血だらけになっていく。

映像アウト。

西岡「手紙でも喋れてない！！」

緒方「手紙でも」

岩国「関西弁を書く」

番場「関西人はたまにいる」

西岡「かけるだろ、文字ならば！！」

西岡パネル奥へ、入れ替わりに正岡。

番場「で、愛は生まれたのでしょうか？」

緒方「ぬん」

岩国「ぬん！？」

緒方消える

番場「先生！！」

岩国「ちょっと先生！！」

2人おっではける。

正岡「先生！！」

MEIN

白衣姿の横長、大川、西岡、野方(早替え)出てくる。

4人「はい」

正岡「病気なんですか？」

横長「さあ」

大川「あなたが」

西岡「奥さんに」

野方「暴力を」

横長「ふるってしまうのは」

大川「病気と」

西岡「言うてしまうには」

野方「あまりにも」

横長「都合が」

大川「いいというか」

動きは、次々と流れで身体検査をされていくような感じ。

聴診器とか、口に棒を入れられたりとか。

正岡「謎なんです」

西岡「謎ではありません」

横長「あれでしょ？DVっていうあの」

大川「ああ、流行りの」

野方「普通ですね」

正岡「DVではない」

西岡「DVでしょう」

大川「家庭内暴力」

横長「夫婦内暴力」

大川「(早口で)DVと言ってもあなたの場合はGVですね。

ジェンダーバイオレンスです。ジェンダーバイオレンスは

主に夫が妻に対して振るう暴力とされていて、

ジェンダーバイアス、すなわち、性的役割にこだわりのある人が

起こしやすいのです。旦那さん、あなた奥さんに過剰な期待をしていませんか？」

正岡「家内は、よくできたやつなんです。よくできすぎてるといふか」

西岡「それが癪に触ると」

正岡「触ってません、むしろ、毎日申し訳ないぐらいで」

横長「あれ、あなた、最初の方のシーンでは訛ってませんでしたか？」

正岡「もうしわけねえーぐれえーでー」

横長「直すんだあ」

正岡「だがら、不満とかねえどげすー」

野方「なるほど」

西岡「ちょっと会議しますんで、お待ちください」

白衣の4人集まる。

横長「わかりました」

正岡「早い！！」

大川「あなたの抱えているものを」

野方「私たちが」

西岡「楽しげにお伝えしましょう」

白衣の4人、クラブを始める。

リズム。

VJ的な映像。

4人「不安です」

大川「あなたもっている」

4人「不安です」

横長「良くできた妻への」

4人「不安です」

野方「ただの押し付けの」

4人「不安です」

西岡「それを発散する為の」

4人「殴る、蹴る、暴力をふるう。不安です」

大川「そうだ、あなたは赤ちゃんです」

横長「自分の存在意義が欲しい」

4人「赤ちゃんです」

野方「あなたが生まれた時」

西岡「あなたの母親は激痛に耐えた」

4人「そうです、そうなんです」

横長「我々の根本に」

大川「痛みを伴ってこそその愛がある」

4人「母親の愛」

西岡「試しているんだ」

野方「実験だ」

大川「あなたは暴力を受けても」

横長「僕を愛してくれますか」

4人「あなたを蹴っても殴っても、僕をあいしてくれますか！？」

正岡「なんて楽しそうなんだ」

横長「フューチャーイズアバーチャルリアリティー！！」

4人「いえー！！」

ハイタッチで祝福しあう4人。

VJ終わり。

真顔に戻る4人と、正岡。

正岡「このように、私は自分の異常性に気付き、カウンセリングを受けた。  
なるほど、そうか、わかりました。私は、ただ、人間であるだけなのだ。  
そしてさっそく次の日に、私は妻を殴ったのです」

大川「ノーバイオレンス」

横長「ノーライフ」

正岡、パネル奥へ。横長、大川、白衣を脱ぐ。

野方「ノーライス」

西岡「ノーパン」

白衣を受け取り、野方、西岡パネル奥へ。

横長「ノーパンなんだけどなあ」

大川「海が見たい」

横長「穴が無いとは。別売りとは。人形とは。そして海へ向かうはめになるとは、  
はめになる。おはめになる。おはめになりてえよ！！  
おはめになれないでしょうが！  
子供たちがまだおはめになれてないでしょうが！！」

岩国と番場クスクス笑いながら通り過ぎる。

横長「ああ、笑われている気がする！！そりゃそうだ、妙齢の男が、  
こう、人形と思わしき、それもラブドールと思わしきものと、  
海へ向かっているのだからな」

岩国「クスクス」

横長「待ちたまえ！！待て君たち！！」

番場「なんですか？変態が僕たちになんのでしょうか？」

横長「初対面なのに！！」

岩国「それあれですよ。姫ちゃん3000」

横長「知ってるのか？」

番場「それ、穴が無いやつですよ」

横長「ああ、ないさ、無いとも、そういう欠点があるやつだ、こいつは」

岩国「そういう意味では穴があるとも言えますね」

横長「どういう事だよ！！」

番場「欠点と掛けたんですよ、穴と、ね」

横長「ほほう、うまいね。うまいから、きび団子あげよう」

岩国「変態からのほどこしは受けません。自分で食べてください。その

汚い口でね。その変態然とした口でいやらしく咀嚼してください」

番場「くちやくちやと音を立てながらね」

岩国「お食べなさいな、見てて差し上げるわ」

番場「あなたに一ついい事を教えてあげましょう」

岩国「あなたの刻んでいる時間はすべからく黒歴史です」

横長「君たち少し言いすぎじゃないか！？」

番場「言いすぎではありません、ものすごく気を使って言っているのがこれです。

心の中では10倍くらい酷い事を思っています」

横長「それを言ってしまったらもう言ったも同じじゃないか」

岩国「それでは、失礼します。私たちは愛を探しに行かなければいけないので」

横長「あ、お前ら見た事あると思ったら、この愛の街のモデル夫婦じゃないのか？」

岩国「よく気がきましたね。その姫ちゃん3000のモデルはワタシです。

愛のない人のケアの為に作られたのがその姫ちゃん3000なんですよ」

番場「ちなみに、彼女には穴があります」

岩国「私にはあります」

番場「それにはありません。では、我々はこれで」

横長「ちょっと待て」

岩国「なんなんですか」

横長「お前ら愛の街のモデル夫婦なんだよな」

番場「はい」

横長「愛を探しに行くと言ったか？」

岩国「はい、私たちは、あなたとは違い、もう普通の愛ではなく、そのワンランク上の

愛を探しに行こうとしてるのです」

横長「俺への愛はどうした？」

番場「はい？」

横長「俺への愛をまったく感じないんだが」

岩国「そりゃあ、ねえ」

番場「うん」

横長「そんな事でいいのかよ、君らあれだろ？愛の親善大使みたいなもんなんだろ？

俺、君たちから、愛みたいなもんを一ミリも感じなかったよ！？」

番場「じゃあ良く聞いてください」

横長「なんだよ」

番場「愛しています。じゃあ行こうか」

岩国「ええ」

横長「待て」

岩国「なんなんですか」

番場「私達も暇じゃないんだ。これから愛を探しがてら、温泉につかったり、卓球をしたりしないといけないんだ」

横長「暇そうじゃないか！！いいか、良く聞け、さっきからお前ら、俺には愛がない愛がないと言っているが、俺は、この5パターンしか、話せないお人形さんの、これ、これだよ(ボタンを押す)」

大川「海が見たい」

横長「これを聞いてだなあ、こいつを海に連れて行ってやろうと思ってんだ」

岩国「それがどうかしましたか？」

横長「これは、この、こいつに海を見せたい俺の気持ちは愛じゃないのか！！」

番場「愛、なんですか？」

岩国「それ、愛なんですか？」

横長「こっちが聞いてんだ！！それは、愛じゃないのか！！」

岩国、番場「ごめんなさい」

横長「え？」

岩国、番場「私たちにはそれがなんなのかわかりません」

横長「わからないだと？」

岩国、番場「逆に教えてください、それは一体なんなんですか？」

岩国、番場パネル奥へ

横長「結局、俺は嘘をついた。これは愛だと。これこそが愛だと。

なんの打算もなく、なんの得もない、この状況で生み出されるのが愛だと。

2人はしばらく俺の話をだまって聞いた後、謎の液体を両目から垂れ流し、

長い旅になりそうだと行ってどこかへ消えた。2人が消えた後も、

俺は考えていたのだ、これは、この気持ちはなんなんだろうって」

■映像 白髪になった瀬野が映り。

瀬野「この気持ちは何なのでしょう？」

大川「わからないですか？」

瀬野「今は、わからないですね」

大川「今はというのは」

瀬野「果てでわかるのだと思っています」

大川「果てには近づいていますか？」

瀬野「ええ、多少暴力的ではありますが、私は大分歳を取りました」

大川「歳を取るのが果てですか？」

横長「海に行かなくてはわからないのではないか」

瀬野「果てるのが果てです」

大川「果てる」

瀬野「人は果てると海に帰るのですか？」

大川「海？なんで？」

瀬野「ああ、なんとなくです、なんとなく」

横長「その時になればわかるのではないか」

瀬野「すいませんね。瞬間で生きてしまっ」

大川「みんなそうですよ、お気になさらず」

瀬野「私は死ぬと屍になります」

大川「なりますねえ」

瀬野「どうなるんですかねえ」

大川「どうせなら、幸せになりましょう！」

横長「こいつを連れて、この気持ちの正体を知りたいのだよ俺は！」

瀬野「幸せですか」

大川「是非、あなたの果てに何かがあるのか、その身体で、その心で確かめてみてください。

私はもう、それができないので」

瀬野「もうできないんですか？」

大川「あなたが生きている場所からずっとずっと未来。光でさえかけ抜けられない、

ずっとずっと先で、私は人形なんです。意思もなく、穴もない。

でもね、それでも旅をしています」

瀬野「どこを目指してるんですか？」

大川「海です！」

瀬野の映像消え、大川、横長もパネル奥へ。緒方だけが出てきて。

緒方「知りたい事や目指す場所に向かう最中の楽しい気持ち。

それだけなんです。それだけが人生なんです。

酷く大まかに言うとそうなんです。私たちは知ってしまった。

知ろうとすることの喜びを感じようとする事の悲しみを。

だけど人は、慣れる、飽きる、希望はかなえられたまま継続しない。

かなえられた希望は継続する為にかなりの労力を費やす事を知り、

人は必ず失望する。だけど知りたいんだ」



西岡パネルから出てきて

西岡「知りたい」

緒方「伝えたいんだ」

野方パネルから出てきて。

野方「ふあえあい」

西岡「だから、私は、彼に、言葉を教えました」

緒方「私たちに必要なもの」

西岡「50の音、50の言葉」

ME

映像、五十音が順に出ていく

西岡「愛」

野方「命」

西岡「運命」

野方「永遠」

西岡「音」

岩国と番場出てきて。

岩国「過去」

番場「記憶」

岩国「空気」

番場「血液」

岩国「恋」

大川と横長出てきて

大川「細胞」

横長「心臓」

大川「数字」

横長「世界」

大川「想像」

瀬野、正岡出てきて

瀬野「退化」

正岡「血」

瀬野「土」

正岡「天国」

瀬野「淘汰」

西岡、岩国「謎」

野方、番場「肉体」

西岡、岩国「主」

野方、番場「根っこ」

西岡、岩国「脳」

大川、瀬野「排泄」

横長、正岡「火」

大川、瀬野「不変」

横長、正岡「変化」

大川、瀬野「法律」

男性4名「満足」

女性4名「道」

男性4名「無垢」

女性4名「名声」

男性4名「盲目」

男女8名「約束、勇気、予言」

緒方「わをん」

全員「和音」

緒方「あいうえお」

瀬野「あ」

正岡「い」

大川「う」

横長「え」

西岡「お」

野方「あ」

岩国「い」

番場「う」

瀬野「え」

正岡「お」

大川「あ」

横長「い」

西岡「う」

野方「え」

岩国「お」

緒方「言葉の構成、50音」

西岡「君に言葉を教えます」

野方「あいうえおあいうえお」

西岡「だから私に、あなたの事を教えてください。」

あなたが何を言ってるか教えてください。ワタシ、あなたに興味があるんです」

野方「ずいぶん長い事、僕に言葉を教えてくれてありがとう」

西岡「さあ、教えてください」

野方「僕はあなたの事が好きです」

西岡「あなたの事を」

野方「僕は絵を書くのが好きです。空を流れる雲が好きです。」

青い空に、白く映えているからです。土に潜る虫が好きです。

虫は作物に栄養を与えます。僕は僕は僕は」

西岡「わかりました」

野方「僕の話す事、わかりますか？」

西岡「あなたにあまり興味がない事がわかりました」

野方「え？」

皆口々に「まじかよ？」等とひそひそしている。

西岡「喋れないあなたに興味があったけでした。ごめんなさい」

野方「喋れない僕はもういません」

西岡「だから、言ってください」

野方「何を」

西岡「私が教えた言葉の中で、一番、この場に適切かつ、一番ふさわしい言葉を」

野方「あ……さようなら」

西岡「さようなら」

野方パネル奥へ消える。緒方、マイクを出して西岡に向ける。

緒方「放送席放送席、今日は、見事、男性を切り捨てる事に成功した。」

西岡さんに来ていただきました」

西岡「こんにちは」

緒方「見事な振りっぷりでしたが、勝因はなんだったんでしょうか？」

西岡「そうですね、やはり彼が、言葉を覚え始めた時に、

あ、なんか違うなってなったんですけど、そこはもう押し通した揚句に  
いってやろうと」

緒方「狙ってたんですね」

西岡「狙ってましたね」

舞台上にいる面子、カメラでパツシャパツシャ写真をとる。

緒方「この後なんですが」

西岡「はい」

緒方「大逆転で付き合うって言う可能性は？」

西岡「ないですね」

パツシャパツシャ

緒方「でも、もし、彼が宝くじを当てたら、その時は……あり？」

西岡「えないですね」

パツシャパツシャ、ティロリロリン(写メが1人紛れてる)♪

緒方「でも仮に？」

西岡「ないですね」

パツシャパツシャ

西岡「それでは、攻守交替で」

西岡、緒方からマイクを取る。緒方、カメラ小僧たちを横切って、少し距離を取る。

西岡「緒方さんお久しぶりです」

緒方「えーと、週刊黄色いワニの西岡さんでしたっけ？」

西岡「はい」

緒方「なんでしょう？」

西岡「愛の街のモデル夫婦、このところ姿を見かけませんか？」

緒方「ああ、連絡は取ってますよ」

パシャパシャパシャパシャ。緒方ポーズを決めて。

西岡「何をしていますか？」

緒方「ポーズを取っているんですよ」

西岡「あなたじゃなくて、モデル夫婦の2人」

緒方「もう普通の愛では物足りなくなったんですよ、

まあ、あなたや、僕のような人間には理解できないかもしれませんが」

岩国、番場はける。

西岡「姫ちゃん3000についてお聞きしても？」

緒方「どうぞ？」

西岡「愛の街公認ラブドール姫ちゃん3000、バカ売れらしいですね」

緒方「バカ売れかどうかはわかりませんが、売れてはいますね」

西岡「あなたは矛盾した事をしていませんか？愛の街を謳いながら、  
ラブドールを販売している」

緒方「それのどこが矛盾でしょう」

西岡「人は人形を愛する事はできません」

緒方「それは、僕たちが決める事ではありません」

大川、横長はける。

西岡「あなたは何がしたいんですか？この街をどうしたいんですか？」

緒方「そうですねえ、あのへんにビルを建てて、そうだな、あの辺に、  
野球場、そしてあの辺には、美術館、あのへんに、大きな劇場を」

西岡「そういう事ではなく！」

緒方「あなたは何を知りたいんだ！！」

西岡「わたしは」

緒方「知ってどうする？」

瀬野、正岡、2人の顔をパシャパシャと撮って。

緒方「知ったら、それで、おしまいですよ」

西岡「知ったら、何かが始まるんじゃないくて？」

緒方「知ってしまう前が一番楽しいんです」

ME

西岡、緒方パネル奥へ。

瀬野「それで」

正岡「え？」

瀬野「お話ってなんでしたっけ？」

正岡「あ、ああ、え？」

瀬野「ずっと黙ってらっしゃるから」

正岡「あ、ああ、ええ、その」

瀬野「大丈夫です」

正岡「何が？」

瀬野「何を言われてもびっくりしませんよ、ワタシ」

正岡「あの、俺と一緒にになって欲しい」

瀬野「一緒に」

正岡「良かったらなんだけどなあ」

瀬野「そうね、いいんじゃないかしら」

正岡「本当にけ」

瀬野「私まだ、あなたの事知らないもの」

正岡「毎日弁当作ってくれ」

瀬野「お弁当に」

正岡「うん」

瀬野「野菜いためつけて」

正岡「うん」

瀬野「コロコロしてる里芋に、骨まで食べられる煮魚」

正岡「うん」

瀬野「肉入れて」

正岡「それでいい」

瀬野「それでいいなら一緒に居ましょう」

仮面をつけた、西岡、野方が入ってきて、2人に渡す。

2人、仮面をつけて、寝そべる4人。

SE海の音。

そこに、大川と横長入ってきて。

横長「海に来て、わかった事は、仲間がたくさんいた事である。

海には大量の姫ちゃん3000が捨てられていた。

なんだよ、なんだこれ・・・」

大川「海が見たい」

横長「うるせえなあ」

大川「海が見たい」

横長「ここが海だ」

西岡「海が見たい」

野方「海が見たい」

瀬野「海が見たい」

正岡「海が見たい」

横長「これは完全に個人的な意見なんだけど、海なんて1人で見るもんじゃないな。

これはやばい。完全な孤独だ。狭い部屋に1人である事が孤独ではない事に気づく、

寧ろ、こんな風に世界の広さを目の当たりにさせられた時に、

あまりにも、当たり前のように、世界のどこかで、人間が1人、

ただただ、無力に、打ちのめされるのだ」

山田が出てくる。

山田「あの一」

横長「なんだお前」

山田「ラブ男です」

横長「ファンキーだな」

山田「アンパンマンみたいなもんだと思っていただければ」

横長「食べれるのか？お前」

山田「食べれないですよお」

横長「なんなんだよ！」

山田「いや、あなた、これ、いるかなと思って」

山田、被っているハートの被り物を差し出す。

横長「お、おお」

横長それを受け取って被る。

山田「お似合いですよ」

横長「うるせえ」

山田「では私はこれで」

横長「そっちは海だぞ？」

山田「帰るんですよ、海に」

山田パネル奥へ

横長「そう言って、やつは海に入って、ひとしきりはしゃいだ後、普通に海から出て、普通に帰って行った。でだ」

大川「海が見たい」

横長「俺がこいつを何故海に連れて来たくなったか」

大川「海」

横長「結局のところ、わからなかったんだよね。これはこれで、そのまま放っておいていい気持ちな気がするんだよ」

大川「海が見たい」

横長「おお、そうか」

大川「海が見たい」

横長「見せてやる、これが海だ」

横長、大川に海を見せる。顔を動かす。

耳の後ろにボタンを発見する。

横長「ん？なんだこれ」

横長、ボタンを押す。

大川「ごめんなさい」

横長「なんで」

大川「ごめんなさい」

横長「なんであやまるんだよ」

大川「ごめんなさいごめんなさい」

横長「なんであやまるんだよ、くそ」

横長、体育座りでうづくまる。



横長「ごめんなさいって、謝って欲しい時でも、言われると凹むのはなんでだろうな」

瀬野、正岡、大川、西岡、野方、だるまさんが転んだをはじめる。

瀬野「だるまさんが、ころんだ」

動かない。

瀬野「だるまさんが、ころんだ」

西岡、動いてしまう。

瀬野「あ、動いた」

西岡「ああ、ごめんなさい。ごめんなさい、動いちゃった、ごめんなさい」

野方「いや、いいですよ」

大川「はやく、鬼に捕まってください」

西岡「でも、動いちゃ駄目なゲームですよ？ごめんなさい、ごめんなさい。

ごめんなさいごめんなさいごめんなさい」

正岡「謝らなくていいですから、はやく」

瀬野「時間がないんです」

西岡「ああ、皆さんをお待たせしてしまっているんですか？ごめんなさい、

ワタシのせいで時間を取らせてしまっごめんなさい」

大川「長いですって、謝らないでください」

西岡「ああ、ごめんなさい、なんか、謝るほどにみなさん、機嫌が悪く」

野方「はやく続けましょうよ」

西岡「ごめんなさい、私が怒らせているんですよね？ごめんなさい、ごめんなさい！！」

正岡「だから、謝るのやめろ！！」

西岡「怒ってる！！ごめんなさい、ワタシのせいだ、ごめんなさいごめんなさい」

瀬野「あの、もうね、あやまれば、あやまるほど、なんですよ。あなたがあやまるのを

やめない限りは、何も進まないのです」

西岡「ええ！！？どういうことですか？謝る事で人を怒らせたなら、どうやって解決すれば

いいんですか！！謝罪は免罪符なのに！！ごめんなさい、誰か、教えてください」

野方「またごめんなさいだよ！！」

正岡「こんなにだるまさんが転べないなんて！！」

西岡「ごめんなさいごめんなさい」

大川「そんなに後悔してるの？」

西岡「え？」

大川「なんだっけ？恵みの里の」

西岡「ああ、あのね、大丈夫」

大川「じゃあ、なんで、すごく謝ってるのかなあ」

西岡「謝ってないよ」

大川「謝ってるよ、寝言で、ごめんなさいごめんなさいごめんなさいって」

西岡「じゃあ、少しは悪いと思ってるんだ。私も」

大川「自覚症状なしが一番最悪だね」

西岡「多分知らないんだ、あやまる以外に、何かを納める事が」

大川「本人には伝わってないけどね」

西岡、瀬野の背中について。

横長、姫ちゃん3000を捨てていくマイム。

西岡「どうしたらいいのか、わからないや」

瀬野「だーるまーさんがーころんだー」

棒立ちの人々。

西岡「人生というルール上」

瀬野「だーるまーさんがころんだ」

西岡「絶対に、誰かが助けてくれるはずだ。と思いながら生きている。

　　だけど、いつまでたっても助けが来ない。後ろを振り向くと」

瀬野「だるまーさんが転んだ」

西岡「助ける気配などみじんもなく、棒立ちで見つめる人々がいたりして」

正岡「君がどうにかするしかないんじゃないのかなあ」

西岡「だから、あやまってるんだ、私は」

野方「だから、あやまれば、あやまるほどなんですよ」

西岡「じゃあどうしたらいいんですか！！」

野方「許しますから。人は許しますから。だから、それを前提に考えてください」

西岡「許される前提？」

だるまメンバー「私たちは君を許す」

西岡「はい」

だるまメンバー「私たちは君を許す」

西岡「ありがとう」

大川「それだ」

西岡「許してくれて、ありがとう」  
大川「それが謝罪よりも高度な謝罪だよ」  
西岡「あ、でもまだ、足りないや」  
大川「ん？」  
西岡「だからあ、許してくれて、ごめんなさい」

パネル奥から、緒方出てくる。  
頭を下げている。

瀬野、正岡、大川、西岡、野方そっちを向く。

瀬野「ごめんなさいというのはどういう事でしょうか？」  
緒方「ですから、今回の姫ちゃん3000が引き起こした。一連についてです」  
大川「姫ちゃん3000が大量に海に捨てられている問題ですが、  
津波が起こる危険性などはないんですか？」  
緒方「ですからそれは、今検証中という事なんですよ」  
西岡「(仮面を取って)週刊黄色いワニの西岡です。姫ちゃん3000の頭のスイッチが  
どこかにぶつかった場合、突風が吹くというシステムがありますよね。  
あれは、どういう経緯でつけられたものなんでしょうか？」  
緒方「ミュージシャンのPVとかで突風が吹いてますよね」  
西岡「はい」  
緒方「あれです」  
正岡「説明になってない！！」  
緒方「姫ちゃん3000は当初、海岸に大量に捨てられている、  
との報告を受けていました。そして、それを回収する前に、  
何者かが、その全てを海に投げ込んだのです」  
野方「後手に回ったという事ですか？」  
緒方「そうとっていただいて構いません」  
西岡「今回のこの件について、どう責任を取るおつもりですか？」  
緒方「辞任です。私はこの街の市長を辞めます」

SE街の雑踏。歩きまわり始める。

野方「なあ、聞いた？市長が辞めたって」  
正岡「ああ、まあ、もういいんじゃない？やりたい放題やったでしょ」  
西岡「私たちが買い物している、このビルも市長が作ったんでしょ？」

横長「そう」

エレベーターに乗るOL2人(大川、瀬野)

大川「思い返してみると、いい市長だったよね」

瀬野「いやいやいや、無いでしょ」

横長「でもさあ、センスねえよな」

正岡「何が」

横長「見渡してみろって」

大川「そういや、さあ」

OL2人エレベーターから降りる、

大川「市長が作る建物の色って変じゃない？」

全員周りを見渡す。

野方「全部紫なんだよ」

正岡「何が？」

大川、瀬野「街が」

横長「なんかさあ、この街、エロくね？」

紫の舞台。

緒方「街は変わる。私がこの街に見出した意味だって、いつか変わる」

正岡「当たり前」

野方「街は変わる」

西岡「あなたが作りたかった街は一体なんだったんですか？」

緒方「いいんですよ、わからなくても、わからなくてもいい事は、

わかってもいい事でもある。わかってもわからなくてもいい事は、

総じて、どうでもいい事です」

西岡「どうでも良くなんかないです。だって私たちは、この街で生きているんですから」

緒方「一つだけ確かな事は、この街にはずっとずっと昔から一本の塔が立っているという

事だけです」

横長「そうだ、ずっとずっと昔から」

大川「私たちは」

西岡「何かに見降ろされている」

SE風が吹く

皆上を見上げる。

壁に絵を書き始める。瀬野、正岡。

大川「ここで一つ質問です」

映像ミッキーマウスの壁画。

大川「これは約700年前に、オーストリア、マルタ村の教会で描かれたこの壁画は  
ミッキーマウスではないでしょうか？」

西岡「しかしこの時代にミッキーマウスは存在しません」

野方「じゃあこれはなんですか」

緒方、監視カメラを外して。

瀬野に近づく。

映像、監視カメラに切り替わる。

緒方「それはなんですか？」

瀬野「これは私が考えたオリジナルキャラクターです」

緒方「名前はなんですか」

瀬野「〇〇です」

緒方「技とかあるんですか？」

瀬野「(答える)」

緒方「ありがとうございました。すいません、そちらの方」

正岡「はい」

緒方「それはなんですか？」

正岡「これは、僕が考えた超人です」

緒方「名前は何ですか」

正岡「〇〇です」

緒方「技とかあるんですか？」

正岡「(答える)」

緒方「彼ら書いたこれらが、何百年か後に、どこかの国で、  
巨大テーマパークのメインキャラクターになる可能性は？」

大川、横長、西岡、野方「限りなく低い！！」

緒方「だけど、そうならないなんて誰が言えますか！？」

大川「たしかに、可能性がないなんて言えないけど」

野方「なんて意味のない可能性なんだ」

緒方「我々は、すべての歴史の上に立っているが、しかし、

ほとんどの人は我々に影響なんぞこれっぽっちも与えていない」

西岡「それは違います」

大川「もし、誰か一人が違う運命を歩んでいるだけで、あなたの存在自体がないかもしれない」

緒方「なんて意味のない」

横長「なんて意味のない考え方だろう」

野方「およそ80年で死ぬ生命体の、何億年にも遡る、生命の歴史なんて」

大川「なんて意味のない物語なんだろう」

大川、西岡、横長、野方パネル奥へ。

瀬野、正岡並んでゆっくり歩き。それを正面から撮影する緒方。

緒方「今からずっと昔、それはそれは昔、どれぐらい昔かも定かではないが、

ここに2人の人間がいた、1人は男で1人は女だった。2人は夫婦だ。

そして、その後ろに」

岩国、番場出てきて、並んで歩く。瀬野、正岡は年老いていく。

緒方「また違う1組の夫婦、概念として、彼らの間には、とても長い時間の

隔たりがある。当然この2組は触れ合う事もないだろうし、言葉を

交わす事もない。自分の今を生きる、まったくもって違う、

この2組は、それでも平等ではないのだ。あの塔がそうであるように、

我々の上には、よくわからない何かが常にあり、それは、必ず、先に生まれ、

先に生きて、先に死んだ、赤の他人のものである。意味なんてものは、

結局のところ、それを最初に生み出した人間にしか分からない」

瀬野「それでも意味を知りたいでしょう」

正岡「それでも歩きだしてしまったんだから」

岩国「強制労働のように」

番場「僕らは歩き続けなければいけない」

瀬野、正岡、岩国、番場、ピタッと止まる。

緒方、自分の顔を映しながら、歩く。

緒方「だから、思うんです。どうせなら、どんなものでもいいから、  
自分の生きた証を、残してやろうってね。意味なんてなくていいんです。  
意味を作るのはきっとワタシじゃない」

映像切れる。スイッチで、最初の映像。緒方、岩国、番場はける。  
瀬野舞台真中に寝そべる。それに立ちつくす正岡

#### ■映像

緒方「ああ、あの塔の話ですか？僕が知ってる事ですよ？

知ってる事、というのかどうかはわからないけれど、  
あれは、神様が作ったんだと聞いた事がある。  
だってさあ、てっぺんが見えないでしょ？」

横長「塔？塔がどうしたって？あの塔がなんなのかって。

あの塔はこの街のシンボルだよ。誰が作ったのかって？  
そりゃああれだろ？ものすごく昔に活躍した著名な建築家だろ。  
名前は知らないけどさ」

西岡「塔の話はしないように言われているんです。理由はわかりません。

でもうちでは昔からそうでした。塔の話はしてはいけないと言われているんです。  
ワタシ、一度万引きで捕まった事があるんです。もう10年以上前ですけど。  
その時、母が「塔から悪魔がおりてきて、あなたに乗り移ったんだ」と言って  
泣いた事を覚えています。多分、あの塔に悪魔が棲んでいると思っているんです。  
え？私がどう思っているかって？それは、まあ、ありえないと思いますよ」

#### ■映像終わり

瀬野「ありがとう、まずこの言葉を送らせてください。約束を守ってくれて  
ありがとうございます」

正岡「当たり前だ、そんなのは。ありがとうを言うのはこっちの方だ」

瀬野「それと、あなたの人生と、ワタシの人生の半分以上を一緒に過ごした事。

旅は終わります。その旅の終わりが来た事に私は感謝します」

正岡「お前」

瀬野「もうさようならです」

正岡「俺1人じゃないんもできん」

瀬野「大丈夫です。今から、あなたが1人で生きていく為の糧をワタシが与えてあげます」

正岡「お前がいなくなって、俺に糧が残るかね」

瀬野「ずっと考えていたんです。この気持ちなんなのか、あなたと一緒にいる  
意義はなんなのか。ずっと、この何十年も。私はこの瞬間を待っていたんです」

正岡「俺と過ごしてきて、お前はどこにたどり着いた？」

瀬野「物事は全て、その過程では結果がでないものです。それでも、人間は、  
はやく結果を知りたいがために各駅停車のように目標をぶつ切りにしますが、  
私はようやく終着駅に着いて、今、景色を見ているところです」

正岡「俺は、お前を失うのが、苦しい、こんなにとは、思わなかった、こんな気持ちに  
人間がなれるなんて、思わなかった。知らない事が、感情の振幅が、  
まだあったなんて、この瞬間まで知らなかった。きっとこれが、俺の持つてる  
感情の中で、最も愛に近いものだ」

瀬野「(静かに笑う)」

正岡「幸せだった」

瀬野「あなた、これからワタシが言う事をよく聞いてください。

私は幸せではありませんでした。あなたの事を愛していませんでした。

屈辱の日々だったのです。その点にただ私は鈍感でした。

もはや、一縷の望みさえありません、これは憎悪です。

憎悪と呼ぶに相応しいのです。それならば何故、あなたとずっと一緒に  
いたのでしょうか。離れる事が一番楽だったかもしれません。

しかし、考えてみてください。これこそが、あなたに一番ダメージを与える

方法ではありませんか。あなたと過ごしてきた日々の中で、あなたが

少しでもワタシに愛されていたと思うならば、それは嘘です。全てが嘘です。

あなたが先ほどおっしゃった、幸せだったのは、ただのあなたの感情に過ぎず、

それに共感する者はおりません。あなたの1人相撲。あなた一個人のものです。

あなたはずっと、ずっと、オナニーをしていたのです。」

## ■映像

P46の瀬野のセリフを編集したもの。

瀬野「いためつけて、ころして、ほねまで、にくい」

## ■映像アウト

瀬野「今、あなたはどんな顔をしているのでしょうか。もう私には

見えませんが、きっと素敵な顔をしているんでしょうね。

ああ、良かった、すっきりした。やっと自分の気持ちがわかった。

ありがとう、さようなら」



静寂。瀬野が亡くなる。

ブレイク。感情の爆発。代弁者。

紫の服を着た。西岡、野方、緒方、大川、横長。

乱射するように言葉を吐く、言葉による殺戮のように。

ノイズのように汚く。

一方で、岩国と番場が出てきて、塔に登って行っている。マイム。

西岡「停止」野方「再生」緒方「後悔」大川「懺悔」横長「愛情」

西岡「後戻り」野方「花」緒方「君に贈った花」大川「アイリス」横長「無意味」

西岡「愛している」野方「昼間の事務所」緒方「騒然とする」大川「膨大な時間」

横長「海の青」西岡「交通事故」野方「少年法」緒方「想定外」大川「情弱」

横長「破壊」西岡「小学校の夏休みのとある一日」野方「倒れたビール瓶」

緒方「泣いている父の背中」大川「DNA鑑定」横長「相槌ばかりの会話」西岡「現実」野方「連休明けの憂鬱」緒方「蝶が羽ばたく」大川「竜巻が起こる」

横長「電気の流れるイス」西岡「汚れちゃった悲しみに」野方「正確な時計」緒方「爆弾」大川「マラソン」横長「つまらない映画」西岡「ジャガイモの芽」野方「葬式の雰囲気」

緒方「再来月の予定」大川「屋根を吹き飛ばすハリケーン」横長「コマーシャル」

西岡「口約束」野方「独裁」緒方「雨の降る六月」大川「オーパーツ」横長「卑怯者」

西岡「輪姦物のAV」野方「盛大な拍手」緒方「ポテトチップスうす塩」

大川「不良の昔話」横長「飲めないブラックコーヒー」西岡「懺悔室」野方「始球式」

緒方「教育」大川「だるまさんがころんだ」横長「万国博覧会」

西岡「プールサイドとパラソル」野方「一等賞金6億円」緒方「枯れたヒマワリ」

大川「絵が合わない漫画」横長「ハリケーンミキサー」西岡「バイトのシフト決め」

野方「気になるあの子」緒方「スタート地点の銃声」大川「嘘をつく罪悪感」

横長「給料泥棒」西岡「磁石を近づけると壊れるもの」野方「エレベーターの雰囲気」

緒方「真面目な討論会」大川「突起したほくら」横長「バラの花束を贈る」

西岡「スペースフィクション」野方「運命」緒方「三次会の場所」大川「褒める飼い主」

横長「先天性の持病」西岡「ペンギンの群れ」野方「戦国時代」緒方「春の訪れ」大川「洗濯物の白さ」横長「多数決」西岡「睡眠時無呼吸症候群」野方「突然のホームシック」

緒方「噂話」大川「菜食主義者」横長「パインソー」

西岡「これらは一瞬のうちに頭を駆け巡った事であり、これら一つ一つに意味などなく、

制御できないレベルのものであり、ビジュアルで表現するならば、

身体中の穴という穴から体液が吹きだした状態である」

野方「これらは一瞬のうちに頭を駆け巡った事であり、これら一つ一つに意味などなく、

制御できないレベルのものであり、ビジュアルで表現するならば、

身体中の穴という穴から体液が吹きだした状態である」

緒方「これらは一瞬のうちに頭を駆け巡った事であり、これら一つ一つに意味などなく、  
制御できないレベルのものであり、ビジュアルで表現するならば、  
身体中の穴という穴から体液が吹きだした状態である」

大川「これらは一瞬のうちに頭を駆け巡った事であり、これら一つ一つに意味などなく、  
制御できないレベルのものであり、ビジュアルで表現するならば、  
身体中の穴という穴から体液が吹きだした状態である」

横長「これらは一瞬のうちに頭を駆け巡った事であり、これら一つ一つに意味などなく、  
制御できないレベルのものであり、ビジュアルで表現するならば、  
身体中の穴という穴から体液が吹きだした状態である」

緒方「これらは全て、原因と結果の物語だ」

番場「なんでなんだろう？」

岩国「え？」

番場「なんで登ってるんだこれ」

岩国「なんでだっけ？」

緒方「彼らは塔に登って行ったらしい、いやこれも定かではない。

登って行ったのを見たというものがいたとかいないとか、そういうレベルの話だ。  
登った理由を知る者もない、一説には、姫ちゃん3000が津波を起こすらしい  
という噂を信じて、塔の上に逃げたのだ。とか、  
街の全景を上から見たくなったのだ。とか、愛の意味を知る為に登ったのだ。  
とか」

上記の話の間に、正岡は、たくさんのバケツを、舞台上に持ち込み始める。

入っているのは土。それを積み上げていく。

緒方、話しながら、紫の服を着た5人が中央に集まり。

岩国「ねえ、ちょっと下見してみて」

番場「ん？」

岩国「下」

番場「うん」

岩国「街が紫だ」

番場「うん」

岩国「あれみたい」

番場「何？」

岩国「花」

番場「みちゃみちや、さすが、ロマンチックが止まってないね」

岩国「しかも、超マイナーな花」  
番場「なんて花よ」  
岩国「たしか、アリウム」  
番場「全然しらねー花じゃねーか」  
岩国「だって超地味な花だもん、ただのまるい紫」  
番場「俺にはみちやみちやの女性器に見えるけどなあ」  
岩国「うっ血してるじゃねーか」  
番場「ていうか、下見るの怖くね」  
岩国「うん超怖い」  
番場「上だけ見よう」  
岩国「うん、上だけ見てれば怖くない」

横長と緒方を残し、紫チームは瀬野を運んで行く。(少し前でも良い)

横長「俺が海で1人で作業に明け暮れていると、こんな事を聞かれた」  
緒方「君はなんでそんな事を1人でやっているんだ」  
横長「え？なにが？」  
緒方「え？なにが？じゃなくて、異常だろ、人形を海に捨て続けるなんて」  
横長「うん、知ってる。知っててやってる」  
緒方「だからその理由」  
横長「いないから」  
緒方「はあ」  
横長「こいつら、いないだろ。俺の事愛してもくれないし、穴もねーし」  
緒方「で？」  
横長「だから、これが正しいかはわかんねーけども、俺は、いないものは  
見えないところに捨てちゃうわけ」  
緒方「なんだそれ？」  
正岡「なんだそれと思われるかもしれないが」  
横長「方法が違うだけだ」  
正岡「忘れたいものは、深く深く」  
横長「どこかみえないところに」  
緒方「なんだ、隠すのか」  
正岡「だから、俺は、愛していた反動で、こうやって、土を上を盛る。  
死ぬまでずっとずっと、無かった事にしたいくて、彼女の上に土を盛る」  
横長「ねえ、手伝ってよ」  
緒方「何を」

横長「最後の一つなんだ」

緒方、横長、人形の手と足を持つような形で、海に投げ込む。

SETブン。

緒方「今どんな気分？」

横長「刑務所から出所した気分」

緒方、横長は正岡の方を向いて。

(相談事項、ここで、大川、横長、西岡、野方によって、檻のようなものに、  
正岡を入れたいのだが。この後の展開も含めて可能かどうか、相談)

緒方「実際どうだろう。何かをしている間、我々は、檻の中に閉じ込められているのかも  
しれない」

横長「なあ、カスタネットバーガーでも食いにいかないか？」

緒方「なにそれ？」

横長「なんかさあ、作りながらカスタネット叩いてんだよ」

緒方「行く」

横長「まずいんだけどさあ」

緒方「だろうね」

檻の中で動き続ける正岡。

大川「私は漂う水の中」

緒方「いらっしやいませ、カスタネットバーガーへようこそ」

横長「じゃあ、チーズバーガーと」

緒方「お客様、カスタネットチーズバーガーでよろしいですか」

横長「じゃあ、そのチーズバーガーと」

緒方「お客様、チーズバーガーはカスタネットチーズバーガーになりますが、  
よろしいですか」

大川「私は沈む水の中」

横長「じゃあそれと、コーラ」

緒方「カスタネットコーラでよろしいですか」

横長「それでいいよ」

緒方「言っていたいでよろしいですか」

横長「カスターネットコーラ」

緒方「カスターネットコーラかしこまりましたー」

横長「それに、カスターネットポテトのM」

緒方「普通のポテトしかないんですけど、カスターネットポテトというのは・・・？」

横長「ああ、そうなの？じゃあそれで」

緒方「チーズカスターネットセットになりますますがよろしいですか？」

大川「私は着陸海の底」

横長「もうなんでもいいよ！！めんどくせーな」

緒方「なんでいいばあい、カスターネットになりますますがよろしいですか？」

横長「じゃあそれでいいよ」

緒方ポケットからカスターネット出して。

緒方「はい」

横長カスターネットを鳴らす

緒方「次のお客様」

西岡「あっ」

緒方「ただいまキャンペーン中でして、こちらのカスターネットに砂糖をかけたものが  
お勧めですけども」

西岡「緒方さん」

緒方「なんでしょう？」

西岡「なんでここにいるんですか？」

緒方「バイトしてるんです」

大川「水の底で、月日がたつと、ワタシの上には土がかぶっていきます」

西岡「私の事、覚えてますか？」

緒方「先日、久々に、恵みの里に顔を出したんです」

西岡「覚えてるんですね？」

緒方「彼、毎日待ってるそうですよ」

西岡「え？」

緒方「最初は玄関で待っていたそうですが、最近では、電話の前で、いまかいまかと  
待っているそうです」

西岡「カスターネットのLサイズください」

緒方「二時間ほどいただきますが、よろしかったでしょうか？」

西岡「はい」

緒方「それでは少々お待ちください」

緒方、西岡に受話器を一つ渡す。

西岡、電話をする。

野方、西岡の受話器を受け取って。

野方「はい」

西岡「待たないでください」

野方「あ、西岡さんだ」

西岡「もう、さよならしたんですから」

野方「こんにちは」

西岡「こんにちは」

野方「また始まりましたね」

西岡「あ、しまった」

野方「もう言いません」

西岡「え？」

野方「僕もうさよならいいません」

西岡「まいったなあ」

野方「言ってください」

西岡「何を」

野方「あなたが僕に教えてくれた中で、この場面にもっとも適している言葉」

西岡「ええっと、じゃあ」

野方「はい」

西岡「うぜえー」

野方、笑顔ではける。

大川「土に埋まってしまったら、ほとんど無い事になってしまった。

海の中でない事になったのだから、私はもうすでに、海そのものになっちゃったんじゃないだろうか」

西岡「一つだけ聞いていいですか」

緒方「駄目です」

西岡「え？」

緒方「一つ聞いたらまた知りたくなりますよ」

大川「海には記憶なんてないんじゃないだろうか」

正岡「土を盛り続けて、それが雲を突き抜けて、君は地上に居ながらも、

深く深く潜ったら、全てを忘れさせてくれませんか。  
なかった事になってくれませんか。まだ、俺には、君の感触が  
残っているのです」

ME

その周りで、岩国と番場は塔から降りてきて、緒方、西岡、野方、大川、横長と  
その音に合わせて、糸電話で会話。

緒方「もしもし」

西岡「もしもーし」

野方「聞こえますか？」

岩国「今どこにいますか？」

大川「地球です」

横長「地球？どこでしょう？」

緒方「知らないんですか？」

番場「地球ですよ？」

野方「我々の住んでる星からは」

西岡「残念ながら」

岩国「その星が見えないんです」

大川「面白いですよ」

番場「その星は面白いんですか？」

大川「ええ？」

緒方「寒くないんですか？」

大川「寒いです」

横長「暑くないんですか？」

大川「暑いです」

野方「痛みは？」

西岡「痒さは？」

横長「苦しさは？」

岩国「すがすがしさは？」

番場「醜さは？」

緒方「美しさは？」

大川「痛いしかゆいし苦しいしすがすがしいし醜いし美しいです」

横長「なんでもありますなあ」

野方「全部あるじゃないですか」

番場「じゃあ何が無いんですか？」

大川「無いもの？」

西岡「無いものですよ」

大川「わかりません」

全員「え？」

大川「だって、無いものって、無いんでしょ？無いから、わからないんです」

番場と岩国、塔に戻る。

大川「ただし」

みんな、正岡を見る。

大川「あったのに、無くなってしまったものはたくさんあります」

ME

檻を回す正岡。(どういう機構で回るかは相談)

そこに映る映像。瀬野。中にある正岡と重なる。

踊っているかのように見える2人。

番場「みちやみちや」

岩国「ん？」

番場「多分もうすぐてっぺんだ」

岩国「うん」

番場「わかるかな」

岩国「なにがわかるかな」

番場「なにかがわかるかな」

岩国「なにかはわかるんじゃない？」

番場「ずっと知りたかったんだ」

岩国「何を？」

番場「ずーっとずっと知りたかったんだ」

岩国「だから、何を」

番場「宇宙の謎とか」

岩国「数字の不思議とか」

番場「もっとちいさなものでいいんだ」

岩国「蟻は何を考えてるんだとか？」

番場「小さいね」



岩国「結局、地球って大丈夫なの？とか」

番場「ちょっとでかくなっちゃったな」

岩国「帽子の鍔と、刀の鍔の起源は同じなの？用途違くない？とか」

番場「うん、いいラインだね」

岩国「ねえ、あれじゃない？頂上」

番場「せっ、狭い！！」

2人は登る。踊り終わる。正岡。瀬野を抱きしめようとする。

が、しかし、映像の瀬野を抱きしめる事はできない。映像消える。

茫然。

緒方、横長、台を運んできて。

大川、西岡、野方、横長、瀬野が岩国と番場を運び、台に座らせる。

そして、2人を取り囲んで見る。我に返って、また作業を続ける正岡。

岩国「わかった」

番場「わかった？なにが？」

岩国「ワタシ、としくんの事そんなに好きじゃない」

番場「ええ？みちやみちやも？」

岩国「としくんも？」

番場「うん、俺、みちやみちやの事、そんなに好きじゃないわ」

岩国「まじかよー」

番場「どうする？」

岩国「どうするもこうするも、もう降りる気力ないよお」

番場「しょうがないからさあ」

岩国「うん」

番場「死ぬまで一緒にいようか」

岩国「そうしようか、としくん……………愛してるよ」

番場「おいおい、返す刀でそれを言うか？こーいつー(小突く)」

岩国「あ、ぼうりよく！」

番場「今のは違うだろ？コツンだろ」

岩国「だって蚊だったら死んでたよ？今の蚊だったら死ぬ威力だったよ」

番場「みちやみちや蚊じゃねーじゃん！」

岩国「ねえねえ、今思った」

番場「何？」

岩国「ワタシ、人間で良かった」

番場「お、お、うん」

MEOU

番場、岩国ずっと立ち上がり。  
緒方、野方、西岡、大川、横長、瀬野と共に、はける。

明りは、正岡だけになる。  
正岡は作業を続ける。マイム。土を掘る音と、盛る音。  
そして、正岡の息遣いだけが連続している。  
檻の中で、彼は作業を続けている。ふと、我に帰る。  
自らを嘲笑するかのよう、笑う。

暗転。

お終い。